
ノーマルorスペシャル

橘 林檎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノーマル・スペシャル

【Zコード】

Z0168B

【作者名】

橋 林檎

【あらすじ】

ある青年の日常をとりまく平凡かつ特別?な出来事。笑いあり?涙あり?青春恋愛活劇。大人の階段のぼるお年頃物語。なんだか考えがまとまらない内に書きだした見切り発車小説。色々いたらないところがあると思いますが、御了承下さい。評価、コメントの方もできればよろしくおねがいします。

プロローグ

はじめまして。

未村 ちゅん（みむら ちゅん）です。一応この物語の主人公らしいのですが、平凡極まりない男で、「や」ります。

知性は中の下。

スポーツは中の中。

顔にいたつても特徴なし。中の上くらい。メガネかけてる。

趣味：オシャレ 特技：なし

夢、希望なし。世の中に不平不満あり。

平凡なんか嫌だーーー！人とは違つ生き方がしてえ！

とは一応いつたものの作者の気分しだいで「一転三転する」とあるのでゆるしてください。

平凡と思つてるのなんか自分だけで、周囲のみんなも大体は自分が平凡で周りは特別と思つてたりするのです…。

さてさて、この物語はどつ進んでいくのでしょうか？

『…………』

うるやく鳴るケータイのアラーム。寝惚けながらもアラームを止め体を起こす。

「ふあ～っ！！」

背伸びをしながら欠伸をする。時計の針は朝の6時をさしていた。いつものように学ランに着替え、洗面所へむかい身だしなみを整える。

キッチンへいくとテーブルの上に菓子パンがおいてあつたのでそれを手にとりカバンを持って玄関へむかう。

茶色いコンバースのオールスター・ハイカットを履いて自転車にまたぎ家をでる。

俺は公立高校に通う1年だ。

一応進学校ではあるが進学校の中でもレベルが一番低く対した大学にいけない、就職もパツとしない中途半端な学校だ。

俺の家から学校まで50分程かかる。軽快にペダルをこじながら菓子パンを頬張る。

特別声をかけられない限り知り合いや友達がいても話したりはしない。

朝はめつりやテンションが低いので誰ともはなす気がおきないのだ。

そんなことをこいつてるまに学校についた。いぐらうの分だとこいつても文にしたら短いものだが、そこには気にしないでおく。

自転車を駐輪場におき、ト駄箱で靴をはきかえる。

周りでは、ひつきりなしに挨拶がかわされているがテンションの低さゆえにスルー。

教室へ着くと自分の席へ腰掛ける。

真ん中の列の一番後ろの席で良くも悪くもない席だ。

周りは挨拶や雑談してゐなか俺はまだボーッとしてボケッとしている。

決して友達がいないわけではない。話しかけてこないので、話しかけないのだ。頭の中の俺がようやくベッドから起きたといふで、
「うん、おはよう

「ああ、来未か…おはよう。」

「来未か…じゃないわよ。あんたボーッとしてぎよーシャキつとなさい。」

「…無理だ。」

と答えたとたん背中を平手打ちされた。
おかげで田が覚めてきた。來末は、

「田が覚めたでしょ？」

とかブツブツ言つてた。

コイツは田　　來末（やまだ　　くみ）

出るといじ出て引っ込むといは引っ込んでる女。色が白く、黒髪の背
中くらいまでのロングストレート。

まあ、可愛いより綺麗な感じの女だ。

高校に入学してからずっと隣の席で、かなり馴れ馴れしく入学当初
から話しかけられ、いつのまにか仲良くなっていた。
当然の」と今も隣の席だ。

「ねえ、ちゅん。誰にブツブツ私の事はなしてんの？」

「ん？ 読者だ。」

「読者だ。つてサラッと答えられても意味分かんないよーーー！」

「ふつ…めいかいやまは知らないで良い世界さ。」

また背中に平手打ちが飛んできた。

ちなみに來末は空手部所属で中学で全国出場したらしい。力は俺よ
りかなり強く、いの女より俺のがか弱い。

あまりの痛さに声がでなかつた。

来末はといふと鼻唄をうたいながら授業の用意をしていた。

「朝から激しいドメスティックバイオレンスだな、ちゅん。」

「ああ、平くんか。おはよう。」

「毎朝、ちゅんのこんな姿見てる気がするよ。大丈夫か?」

「大丈夫だよ。おかげで目が覚めるしな。」

「こいつは不二井 平(ふじい たいら)

頭脳明晰(学年トップ)

スポーツ万能(サッカー部1年にしてレギュラー)

容姿抜群(月1ペースで告白される)

背高い、足長い、スリム、綺麗な顔立ち。素晴らしいイケメンくんです。

こんな完璧人間と仲がいいのは出席番号が前後で、平くんから話しかけてきたのがキッカケだ。

クラスの委員長でもあり人気者だ。

設定が俺と差がありすぎだ…(泣)

「ちゅん、何泣いてるんだ?」

「いや、平くんの完璧ぶりを読者に語るついでこぼれ涙が…」

「ちゅん、読者つてな…」

「平くん、その流れ一回私の時やつたわよ。」
來未が横から口を出した。

「そりか…。」

平くんは困った顔をしていた。

そんな話をしてもつづけられチャイムが鳴り授業がはじまる。

そして俺は、授業開始早々に來未の方を向き振りにつけた。
來未はちゅんの寝顔を可愛いと思いつつも授業をうけるのであった。

昼休み

「ちゅん、ちゅん一起きなよ。もう休みだよー。」
田をあけるとグループになつて食堂へいくもの、一人で弁当食べてるものの姿が見えた。

「あんた寝過ぎだよーまだ1時間田の教科書のままじゃん。」

「来未か…おはよ…」

「おはよ…じゃないわよ。ほんと、あんたは何して学校きてるのよ？」

「何つて、睡眠とピチピチ可愛い女の子を見にきつ…ぐはつ…來未の拳が俺の脇腹に撃ち込まれ、俺悶絶。

「黙れ！…エロ…変態！…サイテー…！」

「おーい。ちゅん飯いこうぜ…って大丈夫か？！」

「た…平くん、大丈夫だよ。慣れっこだから。」

「はーはー。ちゅんも平くんも早く食堂いくよー。」

『はつ…はあーい。』

そんなこんなで食堂に到着すると、隅っこの席にすわっていた優さんが俺に手をふり近寄ってきた。

「ちゅんちゅんおはよー。」

「優さんおはよ。また昼休み登校？」

「そだよ。田が覚めた時の気分でくるもん。」

「そんなんだから留年するんですよ。一緒に進級しましょ」

「わかつてゐよ ちやんと明日からはくるから。」

「この人は間宮 優さん。年齢的には1歳上だが精神的には3歳くらい上のように感じる。学校に全然こなくて2回目の一年生をしている大人チックでぐーたらなお姉さん。色白で身長は一般女子並み、ミルクティーのような髪色のボブヘア。可愛くもあり時には色氣があり不思議な人だ。」

「説明的な紹介ありがと。」

あつ！來末ちやん、平くんおはよ

『おはよー。間宮さん。』

「後、優さんは絵の天才で、幼いころから描いた絵はかなり高額な値で取引されるほどである。」

「ちゅんちゅん説明はもういいから『飯買ひにこ

「そうですね。んじゃ、いきますか。」

こんな感じで4人で昼飯をたべ、昼休みを満喫した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0168b/>

ノーマルorスペシャル

2011年1月4日14時07分発行